第3部 大学事例報告（2012年度）

長崎大学

「国際社会での リーダーの育成を目指す 教養教育の改革と課題」

長崎大学
学長特別補佐
大学教育機能開発センター
副センター長
橋本 健夫

[2012年7月28日 東京リクルートGINZA8ビル]

1. 教育改革の取り組み

教育改革への始動は「全学共有学士像」から

長崎大学の第Ⅰ期教養教育改革ワーキングでは、学長、各学部教務委員長、副学部長が入り、私も座長として加わり、外部識者も入れ、「どうあるべきか」の検討に一年間かかりました。しかし、出てきたのは従来型のリベラルアーツを中心としたものでした。そこで、第Ⅱ期教養教育改革ワーキングでは大学教育機能開発センターが中心になり、モジュール型を採用しました。これは、いままでのリベラルアーツ型からテーマごとの教員団、授業団を作って、そこで学生を鍛えようという仕組みです。

そして、「全学共有学士像」という概念についても各学部の同意を得ました。「全学共有学士像」とは①研究者や専門職人としての基盤知識をもつ人、②自ら学び、考え、主張し、行動変革できる人、③環境や多様性の保全に貢献できる人、④地球と地域社会および将来世代に貢献できる人であり、その基盤を形成するのが教養教育と位置づけました。

国際社会でのリーダー育成はジェネリックスキル育成

具体的な教育改革の目標は、国際社会でのリーダーの育成です。①どの国の人ともコミュニケーションができる人、②世界的視野で将来が語れる人、③自己主張ができ、行動できる人です。こういう人間を育てるために教養教育の改革の中に、「授業への積極的参加」、つまり「アクティブラーニングを組み込む」ことを前提にしました。

先ほどの「全学共有学士像」からのキーワードを抜き出すと、「技能・表現」「知識・理解」「態度・志向性」ごとにキーワードが並ぶことになります。これらを高めるには、現在大学に求められる「21世紀型市民性」や「社会人基礎力」と同じく「ジェネリックスキルの向上」となります。そして、このジェネリックスキルの育成をどうするか、という議論を行った結果が、教養教育の改革となりました。

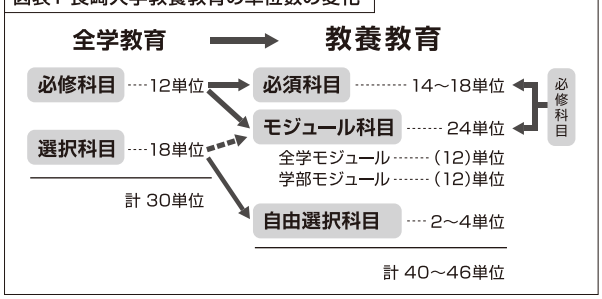
新しい教養教育の方向性と改革の3本柱

新しい教養教育の実施にあたっては、「教員の意識改革」と「いかにして学生を授業に参加させるか」の2点が大きな問題でした。

このために、その骨格として3つの柱を決めました。それは、①教養教育の履修単位の大幅な増加。（長崎大学では教養教育はずっと30単位という全国で最低レベルを維持していました。それを1.5～2倍に増やしたことになります）②英語教育の充実。③教養教育のモジュール方式の採用です。

単位数が30単位から1.5倍程度に増えた詳細は**図表1**のとおりですが、全学教育で必修科目12単位、選択科目18単位だったものを、ほとんどの単位を指定する形に変えました。したがって、自由選択科目は2単位から4単位に狭まっています。その分、モジュール科目は必修で24単位。責任重大となります。

図表1 長崎大学教養教育の単位数の変化



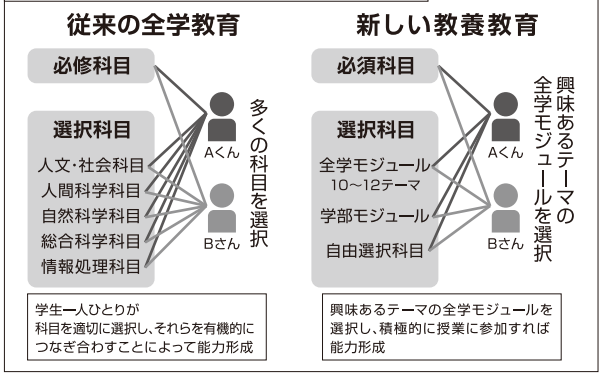
学生にとっての教養教育改革

学生側からこの変化をみると、これまで自由に選択できた選択科目18単位分を、3つの科目群（全学モジュール・学部モジュール・自由選択科目）から選びますので、選択の幅が狭まったことになります（**図表2**）。ここが教養改革の一番のハードルでした。

「教養教育は自由度が高いことによって、教養教育になるんじゃないか。それを狭めて何が教養教育になるのか」というのが多くの先生方の意見でした。それに対しては、「これまでが本当によかったのか」、「学生は単位の取りやすい方へと流れていなかったのか」、「自分の能力を伸ばすという意味で教養教育が機能していたか」、という形での問いかけを行いました。

このような議論を半年間続けた結果、「教員側で考えて学生に提供した形で良かったのか」、「学生の人間形成に十分踏み込むことができなかったのではないか」という反省も生まれ、新しい教養教育へ切り替えていくことになりました。

図表2 長崎大学の学生にとっての教養教育改革



教養教育改革～英語教育の充実

英語教育にも大きく切り込みました。まず、卒業までにTOEICを3回受け、英語運用能力の伸びをみようということになりました。受験料は大学ですべて負担します。その代わり、各学部で卒業時のTOEIC目標値を設置して頂きました。医学部は750点という目標値をすぐに決めましたが、他学部は学生の実情から高い点数を掲げることはできませんでした。

結局、多くの学部は550～600あたりのラインとなってしまいました。この目標達成のために、英語教員の拡充にかなり投資をしました。ネイティブを含めて教員数を倍増しました。

教養教育改革～モジュール方式の採用

新しく導入したモジュールは、21世紀社会人基礎力で求められる批判的精神や課題探求能力等の獲得を可能にするひとまとまりの科目群を指し、1つのテーマを軸に構成されます。そして、モジュールは「全学モジュール」と「学部モジュール」の2つに分類されます。後者は各専門分野での学びの基礎、前者は現代社会が抱える課題を中心に科目群を構成しています。

全学モジュールは、例えば**図表3**のように、現代的課題である「安全・安心」「環境」「経済」「国際社会」を取り上げ、それぞれテーマを設定します。そして、そのテーマにふさわしい科目を設定し、「モジュールⅠ」と「モジュールⅡ」に分けて配置します。「モジュールⅠ」は3科目全てが必修です。「モジュールⅡ」はそれぞれ5～6科目から構成され、このうちから3科目を選択することになります。

図表3 教養科目のモジュールのテーマと科目名

現代的課題	テーマ	モジュールⅠ	モジュールⅡ
安全・安心	**安全で安心できる社会** 責任部局:工学部 連携部局:医歯薬/経済・教育/環境・水産	○健康と医療の安全・安心 ○社会と文化の安全・安心 ○科学と技術の安全・安心	○医療とリスク管理 ○先端医療と安心安全 ○社会の安心安全 ○破壊事故とヒューマンファクター ○エネルギーと資源の危機
環境	**環境問題を理解する(A)** 責任部局:環境科学部 連携部局:工学・教育・経済・水産	○地球温暖化を考える ○水環境を考える ○循環型社会を考える	○環境と倫理 ○環境とエネルギー ○環境教育 ○経済活動と環境のバランス ○海洋環境と海の生物多様性
経済	**現代の経済と企業活動** 責任部局:経済学部	○経済活動と社会 ○企業の仕組みと行動 ○経済政策と公共部門	○国際社会と日本経済 ○地域社会と日本経済 ○企業行動と戦略 ○社会制度と経済活動 ○経営情報と会計情報
国際社会	**グローバル社会へのパスポート** 責任部局:留学生センター	○国際的視点に立った政治と法 ○国際的視点に立った経済 ○異文化理解	○企業の国際展開とその課題 ○国際機関の役割と実際 ○NPO・NGOの国際協力 ○経済及び金融のグローバライゼーション ○途上国支援と国際保護

例えば、「経済」では「現代の経済と企業活動」がテーマです。これは経済学部の学生は受講できません。専門性の高いモジュールの場合、それに関連する学部は受けられないという制約をつけています。このようなモジュール科目を24科目作りました。1学年1700人なので、70名～80名が、それぞれのモジュール科目を選択することになります。ただ、モジュール科目の実施にあたっては、学生参加型のアクティブラーニングを導入したいので、70～80名がぎりぎりのクラスサイズとなります。しかし選択制なので、100人を超えるモジュールも出現するかもしれません。

検討の結果、100名を限度とすることを学生達に周知し、テーマと中身について広報する集会を開きました。

その結果、2012年度モジュール科目で、学生達が非常に好んだのは、コミュニケーション、情報社会、グローバル社会をテーマにしたものでした。一方で、医学部系統の専門性の高いところは不人気でした。また、長崎大学の特徴である「長崎の被爆経験～核兵器のない世界を目指して」の申し込み人数は20名でした。学生には、第1希望から第3希望まで書いてもらい、100名を限度とする原則を守って、モジュール科目はスタートしました。

2. 学習の可視化と能力向上の測定方法としてのPROG試行

教養教育改革の収支

新しい教養教育の実施のために次の5項目にわたって投資をしました。

まず①モジュール方式のための環境整備です。具体的には、アクティブラーニングができる教室を8つつくりました。教室だけでなく、授業の代表者に新しい教育のための情報収集やアクティブラーニングの講習に行くなどに使う準備金として1人30万円を用意しました。また、モジュールⅠ、Ⅱのテーマをまとめる先生方に20万円を用意し、モジュールの教員間のコミュニケーションを密にする方策を講じてもらうことにしました。この準備金で研修に参加する、本を買う、TAやSA制度を整えるなどを行ってきました。その他には②英語教員の増加と言語教育研究センターの開設、③TOEIC等の大学負担、④学習成果の可視化、⑤学生の能力向上の見極めです。

特に、④と⑤の項目をどうするかということが問題としてあがってきました。アメリカの大学等の視察もしましたが、即座に使える良い方法がありませんでした。学生による自己評価や自己申告等の方法はありますが、信頼性をどのように担保するかという問題が生じてきます。また、社会人基礎力形成に必要なコンピテンシーをどう測るかが問題となり、PROGも含め、いろんな検討をしました。

PROGに関しては、受講生約200名で実験的に行いました。しかし、教員がPROGを信じません。「能力を紙で測るとは何事だ」や「文章を読んで、○をつけて、それが能力評価になるのか」などの意見が出ました。しかし、現時点では他の方法が見つかりませんでした。

そこで、PROGテストの効果を検証するためには、全学で実施し、これが効果的かどうかを判断しようと考えました。そして2012年度からは1年生全員が受けることになりました。また3年生の段階でも受けることにし、この2回のPROGの結果で判断しようということになりました。

PROGが学生たちの能力向上測定に適しているかどうか現時点では分かりませんが、彼らに社会が求めている能力を具体的に伝えることができると思っています。それを自覚し、勉学に励むならば良い結果を生むのではないでしょうか。

長崎大学の目標とPROGの測定要素

長崎大学の目標キーワードとPROGテストの測定要素の対応を**図表4**のように考えました。

図表4 長崎大学の目標要素とPROG要素の対応

領域	目標キーワード	リテラシー	コンピテンシー(詳細要素)
(技能・表現)	①自主的探求	○情報収集、○課題発見	○情報収集、○主体的行動、○完遂
	②批判的思考	○情報分析	○本質理解、○原因追求
	③自己表現	○非言語処理力	○話し合う、○意見を主張する、 ○建設的、創造的な討議
	④行動力	○構想力	○目標設定、○実践行動、○シナリオ構築、 ○相談・指導、他者の動機づけ、 ○計画評価・リスク分析
	⑤日本語 コミュニケーション力	○言語処理力	
	⑥英語 コミュニケーション力	教養教育、専門教育の学習履歴と学習評価、 並びに担任教育評価	
(知識・理解)	⑦基礎的知識		
	⑧環境の意義		
	⑨多様性の意義		
(態度・志向性)	⑩社会貢献意欲		○遵法性・社会性
	⑪学問を尊敬する態度		
	⑫自己成長志向		○独自性理解、○学習視点による自己変革、 ○良い行動の習慣化
	⑬相互啓発志向		○対人興味・共感・受容、○気配り、 ○多様性理解、○人脈形成、 ○役割理解・連帯行動、○信頼構築

現在、大学に求められている学習成果の可視化のためには、①教育を語る文化の創造と発展、②教員と学生のコミュニケーションの充実、③評価の厳格化、公平化、④担任教員制と担任による継続的な評価、⑤PROG等の試行と検証が課題です。いずれも大きな課題ですが、特に、⑤のPROGによる検証がうまくできればいいと思っています。